

語用論における推意について

小 泉 保

語用論は意味論から分離した分野である。意味論は文を構成する語の意味を統合する過程を扱う部門であるが、語用論は文の意味とその文が用いられている状況との間に成立する対応関係を扱う部門である。

語用論の内容は、直示（ダイクシス）、語用論的含意（推意）、前提、発話行為と会話の規則に分かれる。

とくに、Implicature（推意）は、われわれの言語活動が経済的效果をあげるように、推論によって談話の間隙を埋める作用である。

例えば、早朝夫婦の間で取り交わされた会話であるが、

夫：「今何時かな」

妻：「今先新聞配達がきたわよ」

表面的には、妻は夫に対し適切な返事を与えていない。しかし、「（今正確な時間は分からないが）今先新聞配達がきた（から、これから、およその時間が見当つくでしょう）」のように括弧内に示された部分を推測により補えば、両者の会話は筋の通ったものとなる。

このように、日常の談話の間を埋める推意作用が働いている。これは言外の言ともいうべきものである。推意は（今正確な時間は分からないが）のような譲歩文や（今先新聞配達がきたから）のような理由文を組み合わせることで推理されるものである。

また、「タクシーに乗ったけれど、汽車に間に合わなかった」という譲歩文は、まず「タクシーに乗れば、汽車に間に合う」という条件文による前提があって、これに従って行動したにもかかわらず、結果的にその帰結が成立しなかったときに用いられる。すなわち、条件文が結果的に成立しないとき譲歩文となるのである。その裏には、「タクシーに乗ったけれど、（交通が渋滞していたので）汽車に間に合わなかった」というように括弧で示された理由文が隠されている。

欧米人は、「映画に行かないか」と誘われれば、「忙しいから行けないわ」と理由を掲げて断わるのに、日本人は「行きたいけれど行けないわ」という形の譲歩表現により、相手の気持を損わないように気を配るが、実際のところは、真の理由を相手に推測させようとする狡い方法でもある。

とにかく、推意作用はさらに綿密な分析を必要とする語用論の中核部分をなしている。

[外国語研究センター主催講演会, 1989年5月19日]